＜株式会社エフエム東京　第４２７回放送番組審議会＞

１．開催年月日：平成 28 年 4 月 5 日（火）

２．開催場所　：エフエム東京　本社 10 階　大会議室

３．委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名　社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

横 森 美 奈 子　委員長　　渡　辺　貞　夫　委員
内　館　牧　子　委員　　秋　　元　　康　委員
ロバート・キャンベル　委員　　川 上 未 映 子　委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（9 名）

冨木田　代表取締役会長
千　代　代表取締役社長
平　　専務取締役
吉　田　常務取締役
村　上　取締役 編成制作局長
山　科　常勤監査役
森　田　マルチメディア放送事業本部　ゼネラルプロデューサー
延　江　編成制作局 ゼネラルプロデューサー
宮　野　編成制作局 編成制作部長

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当　村上放送番組審議会事務局長】

４．議題：　番組試聴　（約 55 分）
エフエム仙台・TOKYO FM 共同制作
『ライターのつぶやき～河北新報の 5 年～』
2016 年 3 月 6 日（日）　19:00～19:55 放送

≪議事内容≫
議題 1：最近の活動について

■2016 年 2 月度 聴取率調査結果について

2016 年 2 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果が、ビデオリサーチより発表されました（調査対象期間：2016 年 2 月 15 日～2 月 21 日）。
当社メインターゲット M1F1 層（男女 20-34 才）においては前回 12 月度よりスコアを下げ在京局中第 2 位となり、課題を残す結果になりました。なお、12-59 才のリーチ（到達率）では 13 期連続で単独首位を継続中です。
今回は F1 層（女性 20-34 才）と女性 20 代で引き続き首位をキープし、平日の 9 ワイド番組で F1 層が全てトップを獲得するなど女性は引き続き好調であるものの、その反面 M1 層（男性 20-34 才）を中心にした男性 20 代・30 代でスコアが下降し、M1F1 全体で順位を下げました。あらためてコアターゲット層にとっての共感ある放送、リスナーの聴取心理・関心事に寄り添った企画演出に取り組みます。4 月改編においては社会的発信力の高い新規コンテンツを投入、広報力の強化とともに聴取率の向上を図ります。

■2016 年 4 月番組改編について

「感動を提供し共感を得る」。この TOKYO FM の理念に基づき、さらなるメディア価値向上・アイデンティティ強化を図るため番組改編を行います。
2016 年 4 月改編では、AM 局のワイド FM 対応、多種多様な WEB コンテンツ等メディア環境がますます激化する中で、若者リスナー・次世代リスナーの拡大獲得に注力します。コアターゲットである M1F1 層及びその前後世代が共感できるコミュニケーションデザインを再整備し、当社編成方針「統合メディア戦略」×「共感コミュニティ形成」を加速させる新番組の編成と音楽ブランドの構築強化を要旨とします。
以下は、4 月番組改編の主要新番組です。

●月曜-木曜　13:00～14:55　＜新ワイド番組＞
番組名：「高橋みなみの『これから、何する？』」
出演者：高橋みなみ
国民的アイドルグループ・AKB48 で総監督を務め、4 月 8 日に卒業を発表している「高橋みなみ」が初の生ワイド番組のパーソナリティとしてレギュラー出演します。20 代 30 代女性をメインターゲットに据え、働く女性たちを応援します。

高橋みなみのアンテナがとらえた毎日の気になるトピックスを分かち合い、様々な分野でのその道のエキスパートをスタジオに招き、彼女の見知らぬ世界をリスナーとともに探り、またリスナーのリアルな思いや夢、悩みを受け止めて相談に乗って聴取者に寄り添う、楽しく温かな共感コミュニティづくりを目指します。

また、スマホコミュニケーション世代のリスナー獲得を最大限図るべく、番組を核とした Twitter、LINE 等 SNS プラットフォームを駆使して話題の拡散と新たな企画開発に取り組んでまいります。

●金曜　6:00～9:00　＜新出演者＞

番組名：「速水健朗のクロノス・フライデー」

出演者：速水健朗（はやみず・けんろう）

月曜から金曜の朝のジャーナルワイド番組「中西哲生のクロノス」を金曜のみ出演者変更し、4 月から毎週金曜日のパーソナリティに、編集者・ライターの速水健朗を起用します。現在 TOKYO FM 夜のニュースワイド「TIMELINE」にも出演中で、鋭い分析力と独自の視点をもった解説コメントに定評があり、メディアにあふれる情報から 20 代 30 代に今必要なニュースから何を読みとり、どう活用するかまで、わかりやすくナビゲートします。

●木曜　20:30～21:15　＜新番組＞

番組名：「TOKYO CALLING」

出演者：大抜卓人・菅野結以

TOKYO FM では今秋、下北沢・新宿・渋谷のライブハウス合計 22 会場で同時開催される大規模ライブサーキット「東京コーリング」とタッグを組み、新たな音楽ムーブメントを創造するフラッグシップ番組「TOKYO CALLING」をスタート。300 組以上のミュージシャンから毎週イチオシのバンドをセレクト、音楽シーンの才能と潮流がうまれる瞬間を伝え、最もリアルなロックの震源地たる番組をめざします。

●日曜　11:30～11:55　＜新番組＞
番組名：「西内まりや『for You…』supported by 日本がん予防協会」
出演者：西内まりや

若い女性ファンから絶大な共感を得る女優・モデル・アーティストの西内まりやが初の FM レギュラー番組を担当。「大切なひと、もの、こと」をテーマに、全国の女性リスナーの日常の心象風景をすくい取ります。また自身も等身大 22 歳女性としての体験、生き方、夢を伝えながらエールを贈ります。

●日曜　15:00～15:30　＜新番組＞
番組名：「Superfly Into The Radio!」
出演者：Superfly

「愛を込めて花束を」「タマシイレボリューション」などのヒット曲があり、類まれなる歌声で幅広いファン層をもつ女性アーティスト Superfly の全国ネットレギュラー番組。Superfly 自身のヒットナンバーはもちろん、彼女のルーツとも言える影響を受けた洋楽邦楽の名曲を厳選。日曜 14 時「山下達郎のサンデーソングブック」に連なる休日の上質な音楽コンテンツをラインナップして、レーティングの上昇を図ります。

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側説明）

○2 月聴取率調査で、メインターゲット 2 位となった原因について教えてほしい。

■男性聴取率のポイントが微減したことによる。女性聴取率はトップをキープしているが、男女合算の総合点で 2 位となった。

○トップを継続していくことは難しいと思うが、また時間をかけて首位奪還にむけて取り組んでいただきたい。

■昨年 12 月よりラジオ全体の SIU が上昇傾向になっており、リスナーから期待を持たれていると感じる。聴取率のデータ分析をしてみてわかったことだが、朝番組は聴取習慣ができているが、その後に続く帯番組の聴取習慣ができていない。１回に長く聴いていただくということも大事であるが、日々の生活の中で毎日聴いてい

ただく、ということも帯番組の生命線と言える。現在はその部分で不安定さがあるため、演出によって平日の好調な部分を週末までどう引っ張るか、ということを考えている。

〇高橋みなみさんの新番組については、現在 TFM が弱い男性聴取者層の取り込みを狙ったものであるのか？

■高橋みなみさんは、女性リーダーとしての素養が非常に高いと感じる。ファン層としても、女性ファンはもちろんのこと、彼女の統率力に憧れる男性ファンも多い。番組では、そのリーダーシップ力を活かして、当社のターゲット層とのシナジーを生み出していただきたいと感じている。この番組がより良いものとなるよう、当社も全力でバックアップ体制を整えていきたいと思う。

議題２： 番組試聴

【番組名】 エフエム仙台・TOKYO FM 共同制作
『ライターのつぶやき～河北新報の５年～』

【放送日時】 2016年3月6日（日） 19:00～19:55放送

【番組概要】
本日、事前にご試聴いただきましたのは、エフエム仙台・TOKYO FM 共同制作『ライターのつぶやき～河北新報の５年～』、エフエム仙台と共同制作したラジオドラマです。
東日本大震災から５年。私たちは何人もの被災地の方に話を伺ってきました。一方で２万人近い犠牲者がいることも事実です。「一言でいいから話をしたかった」「有り難うと言いたかった」、そんな人々の声を想像し、耳を澄ますドラマです。「亡くなった方の無念さ」「一言ご家族に仰りたかった」・・・。亡くなった方の声に想いを巡らせ、リスナーと耳を傾けることはできないか、そうする事でご遺族に寄り添い、少しでも癒やしになることはできないか。そんな思いからラジオドラマの発想が生まれました。
被災地に何度も足を運び、ご意見を伺い、納得頂いた上で制作に臨みました。失われた命と生きている命、それぞれが迎える５年目の春。そこに浮かび上がったのは、ごく普通の家族の姿でした。
この番組はリスナーからの大きな反響に応えて、3 月 30 日（水）に TOKYO FM で、4 月 1 日（金）にはエフエム仙台で、それぞれ再放送しました。

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側説明）

○興味深く拝聴した。流れがちゃんとできていて、このドラマで何を伝えるべきか、震災を忘れないでいるということがどういうことなのか、について非常によく考えられていた。このような大災害を番組テーマとする場合には「当時何があったのか」を事実として忘れないドキュメントと、ある種のフィクションを使って「そこにあったかもしれないことを物語化」して人の心に残す、という記録の仕方があると思うが、このどちらを選ぶかというのは、すごく難しいと思う。
今回の手法では、実際に存在する被災者を登場させることで、事実にフィクションを織り交ぜていっているが、その方法は災害をきれいごとに感じさせる可能性があり、結構危ういと思っていた。しかし最後まで聴いてみて、この手法は有効なのではないかな、と思った。というのも、やはり犠牲になって「今ここにいない人た

ちの声を救う」「その声を想像してかたちにする」ということはフィクションとしてはできないことで、5 年目の節目に「忘れない」ということをテーマとするための手法としては正しかったと思う。

気になった点としては、今後シリーズ化される際にハードルが上がるな、ということである。今回は「亡くなった人が幽霊になって登場し、言葉や想いを交わす」という、王道中の王道の手法を取っており、次回以降は趣向を凝らす必要がある。色々方法はあると思うが、この話はいい意味でリアリティが担保されていたから、物語にしかできないこともきちんと提示されていてよかった。全体的にまとまりも良く、この方法で伝わるもの、この方法でしか伝わらないものがあったのではないか、と思った。

○冒頭にあるジッポの音を聴いた瞬間に、ああ、この女の子はこの世にいない子だ、とすぐに理解できた。ジッポの着火音は久々に聞いたが、とても臨場感があり、ドラマチックに場を彩る。また、ドキュメンタリーと物語をマーブル状にない交ぜにするという手法についても、すごく有効だし面白いと感じた。他の作家の作品にも、震災で亡くなったり、津波で亡くなったりした人のことについて語ったものはあるが、そこは物語だからできた意味や表現というものがあったと思う。しかし今回はどちらも含んだ表現であるということで新鮮だった。

もっと自由に現実から離れての表現、ということもひとつにはあると思う。というのは、現実と物語をマーブル状にしたときに、どうしても現実にひっぱられる。物語がいちばん訴求力が強いから現実からなかなか脱却できなくて、物語だけがもっと鮮明化する。だから今回の番組も、もっと自由に、もっと想像を逞しくして、荒唐無稽な物語にしても良かったのかな、とも感じた。

○このような出来事を表現するにあたって、ラジオドラマを選択することは多くないと感じているので、よくドラマという形式に踏み切ったな、ということをまず思った。反響も非常にあったということで、結果として良かったと思う。だが、創作やドキュメントをモノローグでつないでいるこの作品は、ラジオドラマとは言い切れず、多少半端感が否めない。モノローグは全部心理的な説明であり、セリフも状況説明が多い。ラジオドラマとも言えないし、ドキュメントともまた言えない。ただ、逆に言えば面白いジャンルであり、泣いたという人も多いのでリアリティもあったのだろう。

しかし、もっといい作品にする方法があったと思う。例えばジッポという特徴的な小道具を使っているのだから、もっとＳＥとして面白く使えたなあ、と思ったし、状況説明、心理説明を声優の語りに頼るのではなくて、ドラマを中心に、もっとセリフで使える方法が必要だったとも思う。もうひとつ問題だったのは構成だと思う。少女がこの世のものでないということは、この物語が始まったときにすぐわかる。しかし物語では、さらに進んだところまでその事実を引っ張って、そこで初めて驚

かせる仕組みにしている。結果として、その驚きの効果はあまりないと思う。少女とおじさんの関係など、物語をわかりやすくするためには、構成をきっちり練ったら、もっと面白いんじゃないかと思う。このやり方では少しもったいなかったかな、と思う。

○本当にいい作品だと思った。最後まで聴いて泣いてしまった。いちばんには、被災された方であるとか、肉親を亡くされた方が聴いたとき、どう思うのか、ということをケアした作品だったこと。「メディアが忘れずに取り上げてくれることがうれしい」と思ってくれるのか「触れられたくない」「こんなことじゃないんだよ」などの怒りが出てくるのかな、ということが心配だったが、この作品は喜ばれたことが良かった。また、すごく意味があると思うのは 5 年経ってこのようなドラマを聴くことで「そうだよな」「まだまだ続いてるんだよな」って思い出す人たちがいること。もちろん演出であるとか脚本であるとかは、もっと練らなくてはいけないと思う。

しかし演出的に言うと、さらにあり得ないと思うのはインタビュー部分。インタビューと俳優たちのカットバックがわかりにくい。本来であればインタビュー部分は、もっとノイズがあった方がいい。ノイズがあるから、それぞれの人たちをわざわざ録ってきたんだな、っていうリアリティがある。新聞店の人のインタビューも後方で原付バイクが走る音がすれば、「僕はどうしても震災の次の日に、自分がやらなくちゃ、と思って行ったんですよ」という言葉にリアリティがある。ところが、あれ、これは俳優がやってるのかな、って最初に思ったくらい、冷静に聴こえる。場所を変えて、どこかできれいな音で録ってるから、そこのカットバックが出ない。もっとわざといろんなノイズが入ったり、言葉に詰まったり、下手だったり、興奮したりしながら、あの人たちが語ってくれたら良かったのに、全員がまるで俳優が語るかのような証言だから、ドキドキしてこないんだと思う。

自分も震災があってからすぐに現地に行ったときに、女川のすごい海鮮丼を食べた。例えば、あの海鮮丼の描写などがあったら良かった。他にもお弁当屋さんが海沿いにあった、などの我々が知り得ない情報を出してリアリティを出していった方が良かったんだと思う。そのときに例えば、国道何号線を通って二つ目の信号のところに私のお母さんの働いていたお弁当屋さんがあって、という表現があった方が聴いている人にはそこの場所がわからなくても、状況がもっと絵に浮かぶと思う。つまり、このドラマのすごいところは「現実」をベースにしているところだから、あ、そういうことだったのか、という気づかせる説明が必要。丘の上の学校にいたのに、お母さんが気になって降りていった、何とか坂を見て、何とか洋品店を通って、そこに行ったんです、っていうことがもっと状況的にわかるようにすることが必要だったんじゃないかな、って思う。そこのリアリティがあればあるほど、我々は引き込まれる。フィクションとノンフィクションのメリハリをもっとつけたらいい。

構成については他の委員もおっしゃるとおり、「ぬるい」と思う。せっかくジッポのライターっていうアイテムを使っているのなら、もっと他に何か演出方法があると思う。作家の先生なりの想いがあったんだと思うけれど、例えば成人式だから、そんな暗い時間ではないはず。ライターをボッとつけたら辺りがオレンジ色に照らされた、っていうのは根本的におかしい。それはもちろん心の想いとしてだということはわかる。つまり彼女がライターで灯した火をお母さんが気づいてくれた、っていうことなんだろうけど、フィクションの部分がもうちょっと「なるほど」っていうようなことがあったら、もっとファンタジーを感じ取れたのかな、と思う。

タクシーで幽霊を乗せる人たちのインタビューを新聞で連載して、一冊の本にした人がいるが、その話は本当にいいなあ、って連載中から思っていた。つまり、ちっとも怖くなくて、むしろ運転手さんはうれしいと。亡くなって幽霊になって帰ってきた人を送り届けてあげたい、っていう話を読んだときに胸が熱くなった。このドラマの核もそういうことなんだろうと思う。お母さんは、私が死んだことを自分のせいだ、って思っているけれど、私はお母さんに「ありがとう」って伝えたかった。その誤解を解決するジッポのライターがどういう使われ方をするのか。お母さんが後悔した手紙なのか日記なのかを書いていて、それを彼女がジッポのライターで燃やすのか、とか。そうすれば、「なるほど。このジッポのライターで、親子の間の何かわだかまりを燃やしてくれたんだ」となる。

さきほど言ったことと重なるが、「石碑を作って、私は千年後の人たちにメッセージしたい」っていう中学生の女の子のインタビューも、本当にすごくすばらしいと思う。でも例えば、後ろに野球部の声が聞こえたり、陸上部の練習している声が聞こえたりする中で彼女が言えば、震災から 5 年後の被災地の逞しさのようなものを、もっと伝えることができたと思う。しかし、作品としての試みもいいし、こんなに多くのインタビューを録れたというところは素晴らしいと思うし評価したい。

○TOKYO FM は震災の当日からずっと特別報道体制をひいて、サポートも含めてずっと被災地に向き合ってきたわけだが、5 年目に何をするか、という点では企画を考えることが大変だったと思う。自分もドラマとドキュメンタリーがミックスされているラジオドラマはあまり聴いたことがない。新しい試みである、ということは非常に感じた。ただ、他の委員もおっしゃるとおり、この手法は聴いていて自分の中で混在してしまった。また、インタビューの声に少し演技っぽい感じが出ていて、俳優の語りのように聴こえた。

新しいものに挑戦するということは大変に素晴らしいことだと思うし、テーマも多くの方々の無念な想いを代弁する、という点は素晴らしいと思う。しかし、親しい人が亡くなったとき、というのは本当に幽霊でもいいから出てきてほしい、会いたい、という気持ちになることは不変だと思う。だから表現として当たり前に感じてしまったというか、意外性やひねりがないと感じた。意外性があるエピソードがなかったことが、本当にもったいない、惜しいな、と感じた。ただ、多くの方の感

動を呼び覚ました点においては、番組の意義としては成功だと思う。

○質問なのだが、冒頭の阿部さんの言葉があまりにも淀みないので驚いた。これは台本のとおりに阿部さんがお読みになったのか。

■阿部さんが自分の言葉でお話しされたことを台本に書き起こした。

○お話が非常にうまくてびっくりした。むしろ言葉がうますぎるので、ナレーションとモノローグの区別がつきにくかった。

○いちリスナーとしての欲を言えば、当時からメディアで取り上げられる体験談やドキュメントの構成の主題が全部「家族」だった。やはり「家族」というのはみんなが安心して語れる関係だけれど、本当は「家族」という枠から漏れる人々の関係性も多いと思う。友情や恋人や同性愛の関係や、みんな同じ体験をしているはずなんだけれど、どうしても放送コードなどがあってメディアでは取り上げない。しかし、同じ体験をしているのだから物語としても語られる価値があるものだと思う。もし取り組みとして、今後バリエーションを考えられているのだとしたら、本来の大きな物語からはこぼれ落ちるような関係性にも、ぜひ光を当ててもらいたい。

■「LOVE&HOPE」という被災地の方たちの心に寄り添う番組をずっと放送しており、そのつながりの中からできた番組だった。インタビューさせていただいた皆様についても、元々存じ上げていて取材を申し込んだ。Twitter でも大変に多くの反響があり、次回に繋がるご意見をいただいたと思う。委員の先生方の貴重なご意見も有り難く、今後の番組に活かしていきたいと思う。

5. 放送番組審議会の内容について

審議会の意見は、放送番組審議会事務局から各担当部長に伝達した。

6. 公表

議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送：番組「SPO☆LOVE」
4月30日（土）5：00～6：50放送

② 書面：TOKYO FMサービスセンターに据え置き

③ ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ：TOKYO FMホームページ内 http://www.tfm.co.jp

7. その他

次回の放送番組審議会を、5月10日（火）に開催することを決めた。